

西洋史

イスラム国主 田書店)の個別論文を見て、同社の西洋史ライブラリーの知識人としては例外的に著『スポーツ学の射程』のテロで根幹も、局所の課題がいかに世界経済と結びついていたか『コミニケーションからランソワ・フュレ』歴史の欧米民主主義の知りことができる。

山百合子(編著)『八鷹史』、小林和子『近世ドイツの魔女裁判』、それに岩井淳『ピューリタン革命の文化財の併合』フランスにおける政教分離(岩波文庫)のような旧著の復刻の他、玉木俊明『ヨーロッパの権威』(ちくま新書)が同時に電子書籍化されたように、新媒体でも信頼できる書き手が求められている。最後に、マルクス・シドニウス・ファルクスという古代ローマ人に仮託した(真の著者は監修のジェリ・ドナー)『奴隷のしつけ方』(橋本美訳、太田出版)こそ、「大分岐」を促した近代奴隷制への痛烈な皮肉であることを指摘しておきたい。(たかぎ・いさお氏(名古屋工業大学教授)

テロで根幹を揺さぶられた欧米民主主義

高木 勇夫

『ヴァイキングからノルマン人へ』で完結したハオックスフォード・ブリテン諸島の歴史▽(鶴岡博和監修、慶応義塾大学出版会)全十巻を眺めて、いわゆる「短一七世紀」と「長い一八世紀」の間の大きな転換点を確認しておこう。伝統的な国制史の形を取る青木康(編著)『イギリス近世・近代史と議会制統治』(吉

出版会が実績をあげた。一、ソール『帳簿の世界史』、村井章子訳、文芸春秋社、い。

論との融合の成果が現われ、噂・蜂起・祝祭(岩波書局)など、専門研究者による新しい視座も見逃せない。

身体論としては、松井良明『球技の誕生』人はなぜスポーツをするのか(平塚社)、井上邦子/松渡稔

東洋史

鶴岡和幸(人名古屋大学出版会)は、人寺山恭輔『口爆発、商業化・都市化の新編一九三〇年』(社会評論社)は、進展、社会の流動化に直面した清代の社会論。

近年発掘された竹筒・木簡、遺跡を手掛かりに、海外で死去した華僑の遺体を、如何に故郷へ送還するか。帆刈浩之『越境する身体』(社会史)華僑ネットワークにおける慈善と医療(風響社)は、香港の味深い史料も

新たな始皇帝 明できない

古屋大学出版会)は、朝鮮から北京への使節燕行使と、日本への使節節通信使から、朝貢システム論と冊封体制論では説明できない実態を解明。満洲族については、奇しくもほぼ同時に谷井陽子『八旗制度の研究』(京都大学学術出版会)と世紀末からの華僑ネットワークを解明した。小池求那語(名古屋大学出版会)を得た。八旗制の位置づけで、両者の主張は異なっており興味深い。太田博士語史料も博搜し、対出『中国近世の罪と罰』(犯罪・警察・監獄の社会史)交の可能性と限界を指摘。が垣間見える

史

今年を回顧するが、どのような集団によって形成・伝承され、どのような意欲作。広岡義隆『佛』(名古屋大学出版会)は、近江俊秀『平城京の住

三井グループ、角倉家、徳川家康没後400

経済の分野で多くの研究成果